覺めたる歌

堂子薫著

賢あたる歌

金子薫園作

春陽堂

覺めたる歌

金子薫園作

春陽堂藏版

東洋印刷株式會社印行

岡田三郎助畫

東洋印刷株式會社印行

この書を友人佐藤橘香君に呈す

覺めたる歌

薫園

新しきわれを見いでしとある日に覺めたる歌をうたひつゞくる

ゆたかなる春の光りの照るところ、生れし
地のひろきをおもふ

流れくる軒の木の間の春の日にこゝろひ
まなく野べにゆくかな

しづやかに梢わたれる風の音をきゝつゝ
冷えし乳を啜りぬ

忘れえぬ人なり、されどなつかしき聲のひ
びきの消え去りにけり

無花果の青き果かめばなぐさまる、ものう
きことの夕まぐれなど

夜ふけて藁灰におくぬくもりの靜かに消
ゆるほどをおもひぬ

やはらかにかなしき春のおとづれぬ、かの
わか草の青のいたまし

沈丁花、春のゆふべの庭の面に冷たくにほ
ひひろごりにけり

風落ちし夕野に立てば足もとの草冷やか
に露のおきける

帆をあげてわがゆくさまを秋晴(あきばれ)の瀬戸内
海におもひ浮べぬ

纖(ほそ)き月ひかりを帶びて來るほど多摩川べ
りの黄昏に立つ

秋の日のあかるき空のもとを行く人あら
はにも小さなるかな

武藏野の風の夜に來て落葉のさびしき音
をきゝつくしけり
高原やさまよひくればたのしまず二夜ね
て去る秋風の中

庭の面の靑の木草はこもりあひ、夕さりく
れば濃き陰をなす
風遠くおとなひ來る如くにも林の夜の沈
みかへれり

海越えて安房の國よりひと籠の枇杷ぬれ
來る雨そぼふる日

淡き酸味、病人こそは吸ふべけれ、かくおも
ひつゝなほも枇杷吸ふ

その中の青きを吸うてやゝ強き舌の刺戟
をよろこびにけれ

雨の日の室にちらばる枇杷のたね、哀しき
ことを切りにおもふ

靄のふる遠かた野べの青の樹々かのしづけさをおもひえがたし

春の夜の二階の隅の明り取り、うすくあかみて月出でにけり

椿の樹、いたるところにくれなゐの花、叢をなす伊豆の大島

夕凪の波うちぎはのひたゝにさびしきことをおもひつゞくる

春の夜のあかき灯かげに白魚の冷たき色
をかなしみにける

壺焼のさゞえの煮汁ことゝく吸ひたる
あとの殻はならべり

青草のかをりに寝ねてわかき日をおもふ
に何のおもひでもなし

草淡く青める野べに今日もまたたきりに
春の流るゝを見ぬ

わがこゝろ荒む時あり君われに青き果(このみ)の
汁を吸はしむ

朝の風、椿の花のつゆわたる外(と)のゑづけさ
をひとりおもひぬ

煖爐(すとうぶ)のほとりに置けばさゝふらんの花よみ
がへる氣息(いき)のおぼゆる

年こゝにきはまる暮の空の色、しみ〴〵も
のゝあはれなるかな

冬の日はまともに照れり、今しわれ林をいでゝひとり仰げる

乾きたる空夕ちかきかなしみに、ことさら落葉ふみて歩めり

七年の御忌は來ぬ、あゝ祖母よ弱かりし子は生きてありけり

こゝろありてわが家をめぐり降る如くこの夜の雨の暖かきかな

春寒き黄昏がたの一室にむかひの窓の灯のあかく來ぬ

ありし日の哀しかりけるかず〳〵の、ひと夜の雨に湧き來るかな

今朝の空、季節の代りのいちじるく眼にこそ見ゆれ九月となれり

見あぐれば空には星のちらばれり、人憩ふべき時をあゆめる

はかなげの水草の顫へやまざるに心臓ゆ
るゝを時々におぼえぬ

あわたゞし昨日も今日も君を見れど唖の
如くにわかれぬるかな

青き毬、栗のひとつが落ちしのみ二百十日
は事もなかりき

わがことのやうに厄日をおそれにし祖父
は在さず、空のしづけさ

ちづやかにさむれば青き幻のかの大空に
かへりぬるかな

くちなはの水を切りゆくすばやさをちら
と見しより心やぶれぬ

冬の土わがこゝろはたそこばくの荒びを
のこし一月に入る

落ちし葉はちめ〳〵土に朽ち去りぬ、林の
中は死せるが如し

硝子戸に見ゆるかなたの冬ざれの東京灣
の高き帆ばしら

たそがれの落葉ふる野に身一つを放たれ
てある心地するかな

原中のたそがれがたに迷ひ來しわがさび
しさを問ふ人もなし

秋風は忙(せは)しき音にまぎらせてあまた碎き
ぬ無花果の實を

冬の日の晴れたる空の底ふかく潜みても
のをおもふべきかな

空林のかなたの山の常磐樹の風に搖(ゆ)るゝ
を杳(ほの)かにながむ

赭(あか)ちやけし林を今か出でむとし、こもるゑ
ばしの冬の日の色

霜月の木原(こはら)のなかをうね〳〵とはしる流
れの上の大空

バナ、など食べちらしたる盆の上に夜氣
冷やかに更くるを覺えぬ

原中の月夜はふけぬ、枯草に霜のむすぶを
見てかへりけり

晩秋の林の上の夕月をあづけきものにお
もひながめぬ

あかつきの秋の外面(とのも)の光はも洋燈(らんぷ)の銀に
白くうかべり

遠き空しろ〳〵つゞき、ゐのゝめの雲の何
處にか秋はうごけり

鳳仙花一むらはみな實となりぬ、汚れたる
葉に風わたるなり

秋の日は百日紅にたゞよへり、心次第に醒
むるをおぼゆ

初秋の風冷やかに吹くなべに身内の疲れ
いちじるきかな

桃の葉を背にして駄馬のうちつゞく日中
の街をわれも行くなり
ほとゝぎす山の火燃ゆる邊を去らず、この
高原は物の音もなし

夜氣すゞしとばかり門に出でゝ見る野は
はてしなく露に潤ふ
雨空の夜となるほどをひぐらしの聲きえ
ゆきて樹々は黑めり

桃の葉はあなえり、中にひぐらしの影あら
はにも啼くをあはれむ

いぎたなく家の誰彼れ晝寢する中に眞夏
のあはれをおぼゆ

林よりかへれば脛に血ながれて少し痛む
を涼しとおもへり

極熱のひかりに萎えて青き葉の落つる音
なきかなしみを見る

七生村百草の山ときくからに都遠くも君
をおぼゆる

郊外は冬來ること早くして林を鳴らす風
の音かな

わが脚はおもし鉛を引く如く埃に白き河
岸通り行く

川やなぎ葭戸あけたる藝者屋に晝寢する
子を電車より見つ

枯草にむすべる霜のこまやかにあろ〳〵
つゞく冬を味はふ

雪の後に雨は來れり、夜の如き部屋のゆふ
べにものをおもひぬ

春の日の光りあまねき原中を行くに額(ひたひ)の
やゝにじみ來ぬ

離れゆく人の心のありさまをあづかにひ
とりおもひ見るかな

うれしくも見つる冬野の一すぢの水のほ
とりの水仙の色

なやましき春のゆふべを人々のかたらふ
聲のひゞきのみきく

酒冷ゆる海岸街の旅籠屋に千鳥の聲をき
きて寢にけり

あらはなる枯野の石にわがこゝろ荒むを
おぼえ涙しにける

水仙を氷の花といひし人その青ざめし唇(くち)
をおもへる

夕されば人にも世にも倦みはてしこゝろ
やゝ生く、空のあかるみ

屋根の草、霜ふり月のさる朝に枯れ伏した
るをあはれとぞ見る

何といふざわめきやうぞ枯草にあられた
ばしるたばしが間(あひだ)

春の日のかげりあかるみする如きわが性
格のかげをおもひぬ

ゆゑわかずとある小橋を徂徊し黄に濁る
日を見てかへりけり

君病むといふ日霞のやゝたちて、ものうき
鳥のこもり音をきく

加茂川や柳に雪のしろき日を胡粉とくら
む君しおもほゆ

青黑き木の葉を眺めわれたゞに涙す今日
の事はてにけり

白き蛇、路をよぎりて草に入り草間を水の
如くはしれる

あゝかくて生くべき今日の日に入りぬ、眩
しかる陽に耳鳴りのする

六月の陽の色たゞに乾く見ゆ、潤ひもなき
頭のいたみかな

青草の中に野生(のだち)のつゝじ花、一株づゝの白
きがのこる

黒きものわが眼を壓し、かゞやける強き日
かげに倒れむとしぬ

梅雨(つゆ)に入るその日雨ふり、火の如き柘榴の
花もゑめりてありぬ

君が住むゆふべの町の灯(ほ)かげ見ゆ、埃(ほこり)に白
き風の中より

ひぐらしはあきれり、窓のがらす戸に露し
たゝれり目ざめたる時

水打ちて庭のたち木のよみがへるそのよ
うこびを眺めつゝあり

樹の間より照りかゞやける夏の日の青き
野を見て林を行けり

燈のはづかありてふのみに蟲の翅のはた
はた鳴りて寝ねられぬかな

いつかわれ訪はざりしまに君が門の玉蜀
黍は實となりにけり

夏の日の夾竹桃の青き葉の強き光りにこ
ころさめぬる

初秋の空を仰げばわがこゝろうつるばか
りの透明の色

風すでに秋なり、枕もたぐればあかつきの
樹のざわ〳〵と鳴る

旅人は停車場外の秋かぜに疲れし眼をゝ
ばたゝきけり

鬱とせる眞夏の林うちふるひあらしす、空
にひるがへる青

風まじりゝば〳〵微雨は戸を打てり、默し
て聽けばさびしかりける

こゝろ今ゝづけし見れば青草はやゝに黄
を帶び秋となりけり

君が胸の死せるがごとく靜かなるその平
面にわれは映りぬ
ものなべて安らに觀るをえずなりぬ、わが
感情はそこなはれけり

小春日の麓の町の家々はわが目の下にあ
きらけく見ゆ
ひねもすの風に白けて遠き陽のさむき色
見つ大地を行く

霜むすぶ枯草原をふむ如くわが來し方は
さびしかりけり

菊嗅ぎてありつるほどのうら安さわがこ
のごろになしと思ひぬ

しみ〴〵と眼に沁む白き菊の上をおなじ
き色の風のわたれる

無花果の枯葉さわがせ風は去り風は來り
てなほ暮れずあり

さびしさに幹をけづれば蟲くひの生地(きぢ)あらはれぬ、あはれ無花果

代々(よ)木野(の)の落葉の朝の味ひをたづねて君が門に來りぬ

草の中孵(ふ)りもはてぬ雛鳥はうごめきつゝもなほ生を欲る

ひぐらしや雨戸のひまに曙(あけ)の色しろ〳〵として眼に入り來る

青き草風に光れり濠端を電車たえたる涼
しき月夜

葡萄蔓の匍ひたるまゝに土となりし山路
を春の夕ぐれにゆく

常磐樹を降りうづめたる雪の中にこもれ
る鳥の巣をおもひけり

齒の痛みよべの名殘りの夢の如くつゞき
て今日もなやましきかな

腹立たしく、とつかは君を訪ひくれば障子
を張りて餘念なきなり

枕もと、消さでありにし洋燈の火くらうま
たゝき曉は來ぬ

こすもすの莖の青きに雨ふりて庭しとし
とと暮れてゆくなり

遠蛙おちあひ村の新田の水こえたりや夜
たゞ啼くなり

霜ふれば畑の花ぐさ枯れ〳〵に影繪の如
く眼に映りけれ

冷やかに露けき秋の夜の空を雲わたりゆ
くしづけさを見る

かくれ水、小野のゆふべにうすあかり澤桔
梗てふ花のそよげる

九月末、秋高々と底ひなき大空のもとに憩
ひてありけり

鐘とほし風蓬々とむさし野の林を鳴らし
年あけにけり

われもむかし母ありきてふ一すぢのその
あかるさをおもふ時あり

櫻草(さくらさう)青じろき頰(ほ)のわな〳〵と春さむき野
の夕風にさく

わがこゝろ何か欲(ほ)りする、春の野に陽炎(かげろふ)趁(を)
ひて遠く來にけり

何しかも昨日の心われや趁ふ、椎の林の入
日つめたき

花見ゆる遠き林のたそがれの靜けき影に
なみだしにけり

・

頭にのせし氷ぶくろの冷を吸ふ惡血の音
のかすかなるかな

靄の中、烟草吸ふ火のほのあかりわが前を
ゆく夜霧りの野よ

躑躅さく岡の南の煉瓦塀、青む五月の日の
しづかなる

わが胸の中にひそめるものゝかげ芽ぶく
が如し土の底より

蚊のうなり精舍の中のしづけさを搖かす
如くいとまなきかな

哀しくも夕日のいろの實ぞ落つる祖父が
墓の一もと棗

秋を病む執ねきものゝまつはりてわが心
吸ふごとく寒けき

病むまくら、秋の蠅らの虻ばかり大きなる
來て無花果を食む

秋の晴、高ゆく鳥の三五羽の白きつばさの
遠くかすめる

あゝ疲る、しばし手かけむ樹もあらぬあら
野はたゞに涯りもなく

連翹の垣に夕日のうすれゆくさま見てあ
りぬ、心はなれて

あねもねの薄むらさきの花びらに輕くた
だよふ夕づく日かな

うす暗き室のゆふべに堪へがたく、高き窓
より落つる日を見る

夜の雨にぬめる線路の石だゝみ遠く照し
て電車は來る

さる夕べわが世の人はみな雲の彼方に遠
く去るとおもひぬ

ふるさとの春の入日をおもひつゝこの平
原のわか草に立つ

冬の花に山茶花ありといふことを心強く
も感じぬるかな

風ふけば森の雑木に巣をくへる一群白き
鳥はみな啼く

死せる犬またもわが眼にうかび來ぬ、かの
川ばたの夕ぐれの色

冬の日に野獸のむれのあらはなる林の中
を遠く望みぬ

霜おける屋根のかたへの山茶花の寒けき
色をあかづきに見る

裸木の霜とけそめてきづくする冬の初め
の午前の日かげ

初冬の午ちかき陽を仰ぎつゝ新に生きむ
日をおもふかな

ほそ〳〵ときはまる路に迷ひ來ぬ、暖かき
日を背にうけつゝ

雲わきぬ、わがさびしらの眼に沁む白なで
しこのうすら冷たく

遠き世へうつりゆくごとおもひでのやゝ
に薄るゝ日の寂しけれ

野の秋の水のやうなるあけがたの大氣の
中にわれ立てりけり

秋の風遠(をち)よりきたる物の音(ね)のわが疑ひを
解くごときかな

とある家(や)の垣の上なるくれなゐの夾竹桃(けふちくとう)
の花のうつくし

花のやゝ強きかをりに、うら安う寝(ぬ)る一と
きをさまされしかな

わがこゝろ氣遠くなりぬ、蜩のときれ音ほ
のに消えゆくまゝに

文月のさる日のおもひふと胸にうかびい
でつゝ淡くきえけり

秋の日や鳥の一むれゆきすぎて野はあづ
けさにまたかへりけれ

風の夜の戸のはためきに寢ねがたく、さみ
しく事の破滅をおもふ

秋ちかき青木が原を夕かぜに吹かれてひ
とり旅人は行く

むさし野のなごりをとある杉垣の尾花に
見つゝ涙おぼえぬ

かやぶきの屋根しと〳〵と武蔵野に家居(いへゐ)
して聽くはじめての雨

松かぜは遠汽車の音を吹きなびけ雨來る
ごと夜ふけぬるかな

疾き風は來る、大木の落葉はちゞに亂れて
空を打つなり

枯草に一もとまじる菊の黄のまぎれぬ色
をあはれみにけり

さら〳〵と風に鳴りつゝわが前を楢の落
葉の走りゆくなり

いつしかに雜木林の風たえて冬近き日の
空はをぐらし

上沓のあぶらじめりの蹠に冷たき雨の夕
べなるかな

何となきものおどろきに人一人去なしゝ
如き胸のさびしさ

秋の晴、白丁どもがわが柩舁きゆくさまを
まのあたり見る

窓おせば西日うするゝ枯ばやし過ぎにし
人をまたおもふかな

梅の花黑むゆふべにふと君がかなしき歌
の口にのぼれる

無花果の枯葉はた〳〵のこり葉の裏戸を
打ちぬ木枯のあと

枯木立しらけたる野のあかつきに煙きえ
ゆく空をながめぬ

春の雨ゑづかにふれるあかつきの寢ざめ
の胸の柔かきかな

初夏の椎のわか葉の日に燃ゆる森を眺めて窓によりけり

椎の花、青くさき香にちりしける森の日陰をひとり歩める

野の夕にひとり殘りしわれすらも消ゆるが如くさびしかりける

もの見ればみな涙もつうつくしき女の眼をおもふことあり

藤菜とや君が摘み來しわか草の中にまじ
らふ柔かき花

しけ臭き土藏のかげにかじけ咲く梅のひ
と木のたそがれの色

もち月のころをねがひて花さく夜、佛とな
りし祖父をしぞおもふ（以下六首、祖父を失ひて）

葬りの日、六十一の御賀にと植ゑし櫻のは
らゝちりぬ

野べおくり、晴よろこびしなき人にうらゝ
日なるがせめて嬉しき
御骨壺祖母がかたへに納めてしその夜春
雨しづやかにふる

今日幾日君が目かれて庭の木は春の落葉
のゝ上げくもあるかな
ふと見れば庭の片隅、さゝ草のこもみかた
みと露けさに居り

今日の日に入りしを知らずうら安きあか
つき起きの蜩(ひぐらし)の音(ね)よ

川べりに水を眺むるうしろつき、浴衣(ゆかた)の白(しろ)
の暮れずありけり

南風今日も吹くなり重き頭(づ)をかゝへてう
つら君が瞳(め)おもふ

ものわすれしたるおもひにこの一日(ひとひ)何す
ともなくあり經ぬるかな

春今し逝くてふ夕のかなしみに涙さしぐ
み雲を眺めぬ

草に寢てさむれば遠く鳥が音のかすみの
中に消え去りにける

かたくなにとけぬ地のかげ、春くればいふ
がひもなく空に青みぬ

とある草、ひと莖つめば一莖の小野の春こ
そをかしかりけれ

春の草なよやかなるにうら若き男をんな
のむら〳〵寢たる

夢の如き煙の色のほの〴〵と湖畔の家の
あかつきに見ゆ

何ものもたのまず心ひたすらに水のやう
なるあめつちを行く

乾きたる土につめたく響きくる落葉の音
の哀しきゆふべ

晴れし日の霜どけ路にふみまよひなほ門
遠き君をおもひぬ

日くれがた、疲れはてたる身を起し遠く新
樹のそよげるを見ぬ

わがこゝろ絶えず搖きぬ何としもわかぬ
歎きを感じけるまゝ

春夏の往きかふ空を見てあればうすき緑
のたえず流れぬ

春の雨音なく降れり、かゝる夜は君をおも
ふにうら安きかな

わが家につゞく家並は薄雪の如くも春の
月さしにけり

祖父よ今いづこいかにとおもふ時、忌の百、
日はとみに來りぬ

そぼ〳〵と雨ふる中におん忌の百日はあ
けぬ萱草の花

人の生の旅に倦みては母が胸のふるさと
遠く戀ひわたるかな

わがいのち、死ぬばかりなる衰へを解きえ
ぬ如く五月は來る

椿の葉しと〳〵くれの雨うけて小窓のう
ちはものゝあやなし

君もなくわれもなかりし世に遠くかへら
むとして霧の迫れる

見てあれば遠野の雲はおもむろに動き出
でけり靜かなる日よ

枯草に雨横走る垣の外のゆふ野はろ〴〵
暮れわたりけり

罅入りし白磁の皿の紅いちご、のこりて卓
に燈のあかきかな

ストーヴの室のぬくみに常磐木の雪の白
きをたゞに眺むる

ふと風の青草わたるあづけさに心うるほ
ひたそがれにける

野を來れば蟲のころゑして月かげはかなし
く秋の光はなてり

書くものはみな書きをへて冬の日の暮る
るに間あり雪の降りくる

みぞれふる春寒き夜のともしびのかげ微
かにも花のにほへる

天(あめ)が下、青葉しにけり人みなは衣(きぬ)更へにけ
り新なる日よ

初春の風あたゝかう、わか草にうすくつみ
たる雪をわたれり

曇り日の青黑の葉をさと照らし日は一し
きり輝きにける

朝顏の垣根を鳥の越えゆけるのみに過ぎ
ざる景色なりけり

女郎花おほかる小野の一すぢの路ほのか
にも村につゞきぬ

霜の朝、遠居る人のおもかげを切におぼえ
て心いためり

クリスマス、その日の霜のいちじるくもの
清淨の朝の地の色

冬の夜の街は寢に就き、ともしびの少なき
影も消え去りにけり

目のかぎり、さ青の麥の穗の色に空あかる
みて夕べとなれり

水無月に入る日青葉に白きもの、ちらとか
げして消えにけるかな

わが倚れる森もつゝみてはてしらぬ濃霧(ぎり)
の中に日のおぼろなる

ゑみ〳〵と月の光のあかるさをましろき
雪の上に眺めぬ

夏帽子、冷や〳〵風の吹きなぶるたそがれ
方の町は灯もせず

今朝も雨、晏く起きたる頭の痛みおぼえて
ゐばし柱によりぬ

山中の秋のゆふべのさみしさに音なく霧
のこめきたるかな

をちかたの丘のひと木の晴れくもり見れ
どもあかず秋の心の

秋高き一樹のおよそ中ほどの空に雲あり
動かざりけり

驢馬たえずけだるげに嘶くひと棟に窓は
むかへり秋風の吹く

君がりの一路杳かに晴れわたるはての遠
山、烟あがれり

雲しきりに動くと見つゝ野をあゆむ夕べ
なりけり風、空を行く

熟れすぎて荔枝の中の赤き實はほた〳〵
ちれり十月の日に

たそがれの障子に黄なる日の色を瞼おも
くもゐばし見しかな

秋風に心そゝられあたふたと出づれば空
に白き雲あり

一かたまり野にうごめくは驢馬なりき、口
笛吹けば皆こなた見る

黄なる葉に透きとほりたる纖維見せ輕く
落ちきぬ午後の日のこと

秋ふけて唐桐の花ちらずあるを見つゝ涙
のもよほさるゝかな

窓あけて先づ見る丘の高き家の屋根に霜
なき朝はさびしく

新しきさびしみをしも覺えつゝ春淺き野
のわか草をふむ

重き頭を懈くよせたるゆふべの戸風なし、
山に霧するが見ゆ

あかつきの雨戸に匍へる野の霧の戸を繰
るまゝに襲ひ來るかな

林なす櫨の紅葉に夕映ゆるあかるき野べ
をさまよひにける

乾反葉の五六片ほど、から〳〵と風に鳴り
つゝも枝にありけり

大いなる雪崩を背に受くとだにおぼえぬ
如く卒倒れぬるかな
遠鳥のつばさの音をきゝさして覺めぬ、わ
れはた生命ありけり

死といふこと難しとのみはおもほえず風
やすらかに胸にかよひて
茫として今日もあり經ぬ、卒倒れたる後の
こゝろを傷むともなく

木がらしと外わたる風のあるき時わりな
く涙こぼれけるかな

一とせを逢はぬ心地といひやれば飛ぶが
如くも來べしとおもふに

枯草に雨しとしとくるゝ日はわが世ふ
りぬるこゝちこそすれ

ふけぬるか武藏野を搖る木がらしに雜木
林はおらび叫びぬ

一聯の珠相ふるゝひゞきしてこのあかつきに蜩のなく

雲高う飛ぶ白鳥の羽の光り、秋來ぬとしも眼に沁みにけり

秋の潮、夜ふけてきけば君遠くさすらひ來にし旅をしぞおもふ

くもりたる夕べの空の一ところ、あかるき方に眼をおくりぬる

無花果や、うら戸あくればゑみわれてほた
ほた落ちぬ、靜かなるかな

井のほとり、栗の枯葉の落ちちれるさびし
き音のひまなき夕

澤桔梗ほのかのすがた目にとまり、心のあ
らびをづまり初めぬ

雨の音をきゝつゝ今日も君を見ず、心むな
しく夜となりにけり

ほそ〳〵と蟲は啼くなり、かくてこのふけ
ゆく夜の堪へがたきかな

片隅に凍る雪あり春の日に黑ずみてなほ
小さくのこれり

雪の中一すぢくろき烟突のけむりの色を
近くながむる

この野べの雪夜をかしく、そことなくまし
ろき橋のほとりまで來ぬ

もの足れりされども心なほ悶ゆ、わが生涯
のさびしき時か

竹やぶの中にうごめくものゝかげ、人の如
くも月のしにげり

森かげの雪のあとなるぬかるみに騎馬つ
づき行く後をたどりぬ

屋根の雪やゝにとづくし垂氷(たるひ)する氷の色
と白壁の色

河岸通り雪夜しづかに苫船のまだらに白
くふけわたりけり

よくうたふ鶯ものにおどろきてこもる緑
の椿にかくる

春は來ぬ、そむきし人の媚つくり遠笑見す
るさまのおぼゆる

昨の夜の夢にやつれし君を見て涕ながし
ぬ、なみだ頬にあり

燭をともすと起ちて白き手の雛の肩にや
はくふれける

金の筐來ん一とせを安寢せむ雛の君にわ
かれを申す

椿の花白砂の山にちからある色とこそに
ほへ春の夕ばえ

からたちの花白してふ記憶より月夜を來
れどわかざりしかな

飲めといひ飲まずば打ちもかねまじき怖(こは)
き人より酒をおぼえぬ

酒はよし、醉(ゑ)へばちひさきものすてゝ廣き
世界にわれをおきける

とはいへどたゞにわれなく醉(ゑ)ひもえず、生
くてふ大事(だいじ)背後(うしろ)にあれば

酒さめてさむけき心こともなく暮れゆけ
る日にぞばし對しぬ

潮けぶる棧橋の上に友はその眼鏡くもら
し戀をかたりぬ

はやり唄すたれしふしをよくうたふ島の
藝妓の輕きあはれさ

おごそかに眺め來りし山のさま、けぢかく
對しさびしうなりぬ

したしまずなりぬと初夏を觀たる時いふ
ばかりなくこゝろ哀しき

すがれたる躑躅に雨のそぼふるを見つゝ
われはも家の戀しき

桐の花そのむらさきが落ちちれり、さる路
傍の雨後の濕りに

初夏の葉廣がしはの青の色、見つゝ睫の青
きをおぼゆ

つゞく夜の不眠に人は醉へるごと、帽もか
ぶらず夏の日を行く

その白紙白きを忌みて縦横に塗抹す、心な
にかやすけし

濁りたる流れに月のかげはしてわが蹈む
橋のをぐらかりける

わが道はひらけぬ、遠き野木見れば六月の
日の青う霞めり

夏帽子青の樹の間に遠く見てこの川岸を
さまよひにける

いかにして生くべきかてふ問題を考ふる
べく大人になりぬ

君飢ゑむ、かくおもふ時ひしとわがけだる
き心とりなほすかな

生くといふこの一語には千百の歎きかな
しみこもりてぞあるる

まどろめどむなしき夢のさめやすく、この
ごろものゝはかなかりけり

郊外の歳暮はさびし、冬ざれのいたましき
中に人は默せり

雪いつか雨となりけらし、さす傘の柄漏り
のしづく冷たかりけり

ある時はあさましきこともおもひみぬ、老
いたる人の安らけき胸

秋の潮、磯松が根の舟ゆりて遠くかへりぬ、
わがこゝろなぐ

ひぐらしよ、汝がありあけの清き音にめざめぬ人はあらじとぞおもふ

柿の葉に月の光のうす白く次第に朝のあけわたるかな

わがこゝろ烟の如きむら〳〵のもの吐く方にうつりゆきけり

どよめける歳暮の街の人通りとだえし時を木がらしの見ゆ

くれなゐに山茶花さけり、ぼうぐゝと木枯
わたる野中の家に

雪霽れし入日の空のあかるきに、遠くも君
をおもひわたりぬ

枯木立つらゝに光る日の色を見つゝし居
れば心うるほふ

御祭りの日はおごそかにうらゝかに、冬の
日かげの暖かきかな（師の五年祭に）

北國のうす濁りたる日の色の中に林檎の
くれなゐの濃き

林檎の樹、日のしたゝりの果となりて甘き
色あり寒き香を吐く

五月かぜ汝が歡喜の笑みごゑの生きよと
われにおとづれて來ぬ

強き風に軒をなだるゝ雪の音のまぎれず
胸に沁みとほるかな

終電車青き燈ともる中に居て巷の風をし
づかにきゝぬ

その青き燈のもとにさめもせず寢もせで
何かものをおもへり

あさましく溝に浸れる荷駄馬の開きたる
眼に涙たまれり

凍てし土、杖をたつれば春の氣のほのかに
上るごとく感ずる

秋かぜに都に入れる友の顔三人ひとしく
蒼ざめてける

枇杷の葉の長く青きにわがうれひまつは
るとしぬとある夕べに

月空にのこれり露のしろ〳〵と野の何處
にもおきわたるかな

人去りてしらけし室のたゞ中に洋燈の臺
の黑く冷たし

初春の日に照らされて裸木の梢かすかに
うるほへる見ゆ

椿の葉なめらかなるに、初春の日は柔らか
に輕くうかべり

冬の日のをぐらき夕(くれ)の室内の死せるが如
きものゝ色かな

一すぢの吹雪にけぶる路遠く、更くる夜に
見ておもひ哀しむ

灯のあかき教會堂の見えそめて雪夜の路
のはかどりにける

樹の皮にまだらにたまる雪融けてゐづく
の色のあたゝかきかな

海の香にこゝろ渇きて寢ねし夜に君が夢
こそかよひ來にけれ

春の雪しと〳〵來りゐと〳〵と消えゆく
夜のあはれ味はふ

一月の溫泉の山のあかつきに湯氣の色見
て街にくだりぬ

雪ふかくこもれる家の灯を橋の上より見
て過ぎにけり

草靑む春のはじめの日のかげに開けたる
野の末は霞みぬ

新しき天地に面むけし如きこゝろゆく日
の春にあひける

〔畢〕

明治四十三年三月十二日印刷
明治四十三年三月十五日發行

鬱めたる歌
（實價金四拾錢）

著作者　金子薫園
東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者　和田靜子
東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印刷者　中野鎌太郎
東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　春陽堂
東京市日本橋區通四丁目五番地
電話本局五一番
振替口座東京一六一七

◎内に發行者
◎印刷所
◎印刷所
◎なを著作權

新體詩、俳句、歌書類

露伴氏著
心のあと
出廬
實價金八拾錢
送料金八錢

鷗外氏著
うた日記
實價壹圓八拾錢
送料金八錢

鶴伴氏著
出廬抄註
實價金參拾五錢
送料金六錢

藤村氏著
藤村詩集
定價金八拾錢
送料金八錢

春陽堂發行

新體詩、俳句、歌書類

信綱氏撰
歌集玉琴
實價金五拾五錢
送料金六錢

泣菫氏著
二十五絃
實價金壹圓
送料金八錢

藤村氏著
夏草
實價金參拾錢
送料金四錢

無涯氏著
すいかつら
實價金七拾錢
送料金六錢

春陽堂發行

新體詩、俳句、歌書類

酒竹氏著
鬼貫全集
實價金五拾錢
送料金八錢

ロイド博士著
皇國ぶり
實價金八拾錢
送料金四錢

酒竹氏著
與謝蕪村
實價金參拾錢
送料金八錢

ヨネ野口氏著
英詩夏雲
實價金七拾五錢
送料金四錢

春陽堂發行

新體詩、俳句、歌書類

和風氏著
俳諧研究
實價金六拾錢
送料金八錢

和風氏著
俳家逸話
實價金四拾錢
送料金六錢

和風氏著
戀愛俳句集
實價金參拾五錢
送料金四錢

和風氏著
閨秀俳句集
實價金四拾錢
送料金四錢

春陽堂發行

新體詩、俳句、歌書類

松宇氏著

中興俳諧 **五傑集** 上下

實價各貳拾五錢
送料各四錢

原稿用紙 小中二百字詰

小形百枚拾貳錢
送料金四錢
中形百枚十五錢
送料金四錢

文學雜誌

新小說 毎月一日一回發行

實價金貳拾五錢
送料金貳錢五厘

春陽堂

圖書目錄 毎月發行 (非賣品)

往復はがきにて御申越次第送呈

春陽堂發行

KUBOKAWA
小坂川書店